

「跳び箱運動」教材における「表現性」の問題

K. Yasutake

○「跳び箱」は何を教える教材か？

〈堤 吉郎「とび箱教材の歴史と問題点」『運動文化研究 12』1994 年〉より

スウェーデン体操（ギムナスティック：リング）身体訓練の道具としての「とび箱」
運動の良し悪しの基準は「身体育成の目的に合致するかどうか」

柔軟な体づくりやリズムカルな動きを身につけることを目的

ドイツ体操（ツルネン：ヤーン）乗馬術という実用実の道具としての「跳馬」

→（ギムナスティック・ツルネン）両方とも「体操」と訳された

熟練した技能を習得し、その巧みさを競い合うことが目的

それに加えて、騎士教養としての上品さや優雅さが要求された

→日本での混同の原因

体操競技の特性：「非日常的驚異性」と「姿勢的簡潔性」（金子明友）

木馬（1871）近衛鎮台兵の訓練用→「体操教範」で跳馬系の運動が継承

→スウェーデン体操の影響で「木馬」は姿を消すが、競技としての跳馬運動に継承
とび箱（1901）スウェーデン体操の器械

→1913(T3)学校体操教授要目でスウェーデン体操が採用→学校の普及

→その後跳び箱運動は跳躍運動の一つで、表現技術の競うスポーツとしてではなく
身体と精神の鋳型化機能をもつ教材として存在していた

体操競技 1902 (M35) 慶應義塾に器械体操倶楽部設立

「体操」の影響が強く表れていた（ex 筋力を近東に発達させる）

1932 (S7) ロサンゼルス大会では「タンプリングや巧技風の技」を見て「感服」

※「強健な筋骨」と「剛毅な精神力」を養う道具として導入された「とび箱」は、戦前までその考えを変えていない

1947「学校体育指導要綱」 「発育・発達」が重視

「跳び箱運動をすると、…胸郭の発育及発達、身長増加、脚力の養成に役立つ」

1953「学習指導要領」（試案：体育科）「発達」「民主的人格形成」「運動の生活化」

「力だめしの運動」に跳び箱：「とび上がりおり」「とび越し」「転回」

1958「学習指導要領」（法的拘束性）：

体育の目標を「体力づくり」と「運動の技能習熟」に矮小化

とび箱に「高さ」の規定が登場→運動能力を測るものさしとして機能し始める

1968「学習指導要領」：「体力主義」体育

「器械運動」はスポーツの中に位置づけられる

が教える中身は「調整力、筋力、柔軟性と努力、協力、安全に関する態度の育成

1977「学習指導要領」：「楽しい体育」⇒「自己の能力に適した課題を持って」能力主義

「器械運動」は「克服的スポーツ」、とび箱は克服すべき「障害物」

だが跳び越し方で「大きな動作で」とか「助走、踏み切り、跳び越し、着地までの一連の動作がリズムカルに」など、スポーツとして「跳び箱運動」を捉えようとしている

1989「学習指導要領」：「克服的スポーツ」という言葉は消える

「頭はね跳び」が例示されるなどスポーツとしての「とび箱」化

1998「学習指導要領」：体育「心と体を一体としてとらえ…」

2008「学習指導要領」：体育「身体能力」

2017「学習指導要領」：「見方・考え方を働かせ…資質・能力の育成」

とび箱「切り返し系や回転系の基本的な技」

スポーツ系全ての目標「その運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付ける」

「とび箱運動」は何を教えるのにふさわしい「教材」か

「とび箱運動」で教えるにふさわしいもの

（創刊からの「体育家教育」「学校体育」におけるとび箱実践からの分析：堤）

（殆どが「跳びこさせること」に終始、他に体力、態度、精神力、健康安全等）

①とび箱運動の技能・技術

②とび箱による空間表現（身体支配能力を含む）※「空間表現」は同志会から

③とび箱運動技術の分析・総合

④とび箱の歴史

「表現」に注目しはじめたのは 1960 年代に入ってから

• 1967 年教科研

「小3、空中で自分の思う美しいフォームがとれること」を教材の値打ちの一つに

• 1976 年斎藤喜博の指導による公開研究会で「みごとな演技」

• 1960 年代同志会系統性研究で「とび箱による空間表現」という特質規定

「跳馬」というスポーツは「空間表現」を競うスポーツであるが、学校体育の中で「とび箱」を使って「表現」を教えることができるのか。「とび箱運動」は「表現」を教えるにふさわしい教材なのであろうか。

「表現」：芸術的活動の中で使われることが多い。「表現」は「享受される」ことを前提

小学校の音楽科と図工科では、「鑑賞」と「表現」が対になっている

体育科では、「表現運動」という領域には創作ダンスや民舞がある

「とび箱」でいう「表現」とは、

自分の思いや民衆の思い、願いを伝えたいといった「表現」ではなく

自己の身体をコントロールするという「表現」

少なくとも「創作」「構成」という要素を含んだマット運動の方が適している
それにもかかわらず、「空中に浮く感じがたまらない」「とぶ時の緊張感が好き」「めあての技ができて跳び上がるほどうれしい」という子どもたちの声をどう受けとめたら良いのであろうか？

〈山内基広「とび箱の系統を追って」『運動文化研究 11』1993年〉より

※この時点での山内の「とび箱運動の系統」の考え方

「台上前転⇒台上ネック・ヘッド⇒前転跳び(ハンド)」か

「横跳び越し⇒ひねり横跳び越し⇒側転跳び⇒ハンド」は「運動の系統性」の違い

現在は、「指導の系統性」あるいは「指導順序」としての論議に移行しつつある

①器械運動の特質と技術特徴

器械運動の特質（おもしろさ）は器械を使った空間表現

＝器械とその空間に器械運動の技術をもって自由に身体表現（空間における身体支配）
すること

↳ 器械とその空間を以下に身体制御するか

身体制御は、演技者の器械を含む空間認識と主に『頸反射作用』による身体コントロールによってなされる

つまり、とび箱（器械）における『表現』とは「空間における身体支配＝身体制御」という内容と考えている

②跳び箱運動の系統（技術特徴）

跳び箱運動とは

助走・踏み切り支配・第一局面形成・着手・つきはなし・第二局面形成・着地という一連の動作による『支持跳躍運動』である

技術系統は反転系と転回系に分けることができる（台上前転等は位置づかない）

〈新学校体育叢書『器械運動の授業』より〉

第2章 器械運動の教育内容と指導の系統性

1. 器械運動の指導でどんな力をつけるのか（安武執筆部分）

- 1) 「できる」喜びを「みんな」が共有すること
- 2) 「わかる」「できる」喜び〔技術の分析と総合〕を学ぶ
- 3) 技術の分析・総合を通して「表現・鑑賞」を学ぶ
- 4) 器具・用具・競い合い方（ルール）の変遷と技術の発展の関係を学ぶ

技術の分析・総合を通して「表現・鑑賞」を学ぶーとは

①器械運動は「採点基準」による表現性を競い合うスポーツ

スポーツの文化的特質の一つに「競い合い」がある

体操競技がその歴史的発展の中で力比べ・力試しの運動から表現性を競い合うスポーツに発展していった

⇒器械運動においても「表現性を競い合う」ことの面白さ・独自性を追求する必要あり
表現性を、独自の「採点基準」によって競い合う

「表現性」の質が重要になってくる⇒連続表現が可能なものにおいては、単技一つより次々に連続して全体として構成のある作品化した連続技が求められていく

②連続技で身に付けたいこと

- 1) 変化ある表現 技の大小・リズム・スピードの変化：技の組み合わせ方＋こなし方
- 2) つながりのある表現 前後の技に規定されたつながりや見せ方
- 3) 時間・空間の構成による表現 線→面、個人→集団、音楽なし→音楽あり

③「採点基準づくり」と「競い合い方」：これらも学習の対象としていく

2. 器械運動の文化的特質と基礎技術の見方・考え方（平田執筆部分）

文化的特質：器械を使った、（採点基準に基づく）時空間での「技」による身体表現運動

基礎技術：姿勢制御を伴う手足の協応による支持回転動作

運動名	鉄棒運動	マット運動	跳び箱運動
特質	鉄棒を使っての時空間における、技の連続性による身体表現運動	マットを使っての時空間における、技の連続性による身体表現運動	跳び箱を使っての時空間における、技による身体表現運動
基礎技術	スウィングを含む姿勢制御を伴う、手足の協応による支持回転動作	踏み切り支配を含む姿勢制御を伴う、手足の協応による支持回転動作	踏み切り支配を含む姿勢制御を伴う、手足の協応による支持回転動作
基礎（教材）技	スウィングを含む足かけ回転型の技	ジャンプを含む側転型の技	横跳び越し型の技
基本技	各ファミリーにおける目標技	各ファミリーにおける目標技	各ファミリーにおける目標技

3. 器械運動の指導内容とカリキュラム作り（平田執筆部分）

（2）個人演技と集団演技

体操競技においては、…基本的には個人演技が中心です。しかし、体育同志会においては以前から…、近年においては体育同志会以外でも…集団演技を学習対象とする実践も多く見られるようになってきている。

「グループ（集団）で演技することの有効性」2006年山内

- ・相手を意識することによって、時空間の認識がしやすくなった。 ※限定的
- ・技の量が少ないのがカバーできた ※学持って習の行き方による
- ・時間的制約、限定用具の現状では節約できた ※逆もある
- ・一人で演技するより楽しそうに演技していた ※学習の持って行き方による
- ・グループを構成している一人一人を、作品を協同で創ることを通して、学習に関わらせやすくなった
- ・作品をさらに高めようとすることによって、新たな技の追及に意欲的に取り組むようになった ※個人マットでも同じ
- ・作品をみんなで演技することによって、一体感を共有することができた
- ・個人の技術も飛躍的に伸びた ※学習の持って行き方による

平田：集団ですることによって演技が繰り広げられる時空間の認識（構成）がしやすくなる
 集団内での協同学習が進みやすくなる

何よりも「表現性」を初期の段階から学習対象にしやすい

第3章 器械運動の学習指導方法と学習集団づくり（剛力執筆部分）

P54（4）オリエンテーションの具体例（集団マットを例に）

②オリエンテーション2

（イ）学習の進め方（全体計画）を理解します

- (i) はじめ「技調べ」
- (ii) なか1「技づくり」
 - ・基本になる技の組み合わせの学習（回転、接触回転、バランス技の基本）
 - ・組み合わせの「つなぎ」の見方・考え方と工夫
 - ・基本の技から発展学習による技づくり（応用やバリエーション、発展技づくり）
- (iii) なか2「作品づくり」
 - a. 「その1」集団マットの基本である、二人の演技による、空間構成の仕方を学習する
 - b. 「その2」音楽やテーマを考え、演技構成を話し合っ作る。（場面をいくつにするか、場面ごとの演技をどうするか、見せ場・山場をどこにもってくるかなど） 続いて、話し合った結果を、絵コンテなどにし、演技脚本化する。そして、ためし・確かめの取り組みをして作品を仕上げます。
- (iv) まとめ1：演技発表会
 - a.演技発表会の企画運営原案をチーム代表者会議で検討し、「みんな」に提案
 - b.事前・当日・事後の取り組みについてねらいとともに、討議し決定する
 - c.みんなで決めたことをひとりひとりが責任をもって実行する
 - d.当日の演技の鑑賞・批評ができるようにする
 - e.チーム代表者会議で成果と課題をまとめ「みんなのもの」にする
- (v) まとめ2：学習のまとめ
 - チームの足跡を中心に、はじめ、なか、おわりの時間の流れに従って、授業感想文を綴る

2. 器械運動における「技」と「連続技構成」の企画、記録と分析

運動を「準備局面」「主要局面」「終末局面」の三つの局面で把握することは、単一技においても、連続技においても、つまずき局面の原因を分析し、解決することに有効に働く。

(3) リズム[流れに由来]、タクト[触れる叩くに由来]からの分析とお話、音楽、言葉(指導言)の工夫

体操競技の床運動：技の難易度を中心にしながら、高さ、距離、姿勢を手がかりに、力強さ、雄大と技の組み合わせの構成による流暢性(タクト、リズム)を作り出していく

動きのリズム(力動構造)は音楽のリズムではない。しかし、この構造が音楽やお話、言葉のリズムにあっているときには、それらによるリズム的表現が有効に機能します。

(4) 集団パフォーマンス(集団演技)

個人のマットか集団のマットか…これらを統一し、相互に関わらせながら「マット運動」として発展させていくことが必要

p61 2人の演技を中心に、6人グループ…これだと最初から2人の演技のタイミングが課題となり、…集団と個人の関係で、球技のように集団2人の調和を中心に、個人の演技が高まっています。

作品中心主義ではなく「表現」を大切にする観点から、集団マットの方が、より教材としての価値が高くなる…

p63 球技のシステム論で役割分担主義があるように、集団マットでも一歩間違ると役割分担主義になってしまいます。「どの子にもつけるマット運動の基礎」が教育内容に位置づけられなければなりません。